

# 博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 宮崎恒二



## 論文の概要

本博士学位請求論文はメキシコ、オアハカ州の一農村におけるカルゴ・システムに焦点を合わせ、農村とそこから首都メキシコ市へと移住した人々の相互関係を論じたものである。数次にわたる長期間のフィールドワークに基づく本論文は、これまで「閉鎖的農民共同体」を生み出し、維持させる要因として捉えられてきたカルゴ・システムが、村落世界の開放性が高まる中、基本的骨格を保ちながら、新たな展開を示し、村とそこから流出する者の間の絆となっていることを明らかにし、従来の都市研究と農村研究を繋ぐ新たな可能性を示している。

## 論文の内容

本論文の構成は次の通りである。

第I章では、論文の目的と意義に触れた後、メキシコにおける村落-都市研究およびカルゴ・システム研究の流れを整理している。メキシコ農村研究における一つのステレオタイプは「閉鎖的な農民共同体」であり、それを支えるのがカルゴ・システムであるとされる。他方、都市研究は、主として都市的状況で発現するエスニシティ研究に力を注いできた。しかし、いずれの場合も、農村と都市の関係を正面からとらえていないこと、そして前者においては地縁的共同体、後者においては「～族」という集団カテゴリを問題の基本として立てていたことが指摘されている。

第II章は、主たる調査地であるオアハカ州、サン・マルティンの地理的・社会的環境、そして生活全般に関する詳細な記述である。

第III章では、調査地の人々の様々な自称が使用される状況を通じ、在住者の「我々」意識が明らかにされている。従来、「～族」という社会単位で捉えられることが多かったが、本論文は、社会組織や儀礼を詳述することを通して、サン・マルティンをはじめとする村落社会の人々の意識の中では、自らが「村」と呼ぶ地域に基本的なアイデンティティを持っていること、そして都市に移住したサン・マルティン出身者の多くもまた、出身の「村」に強い愛着を持っていることが明らかにされている。とりわけ、その愛着は、村の墓地への埋葬という希望に表現されている。

第IV章は、都市への移住者に関する調査に基づく、村からの移住の要因、職業、生活、村との関係などに関する詳しい記述である。サン・マルティンからは出生登録人口の40%以上が都市部へ流出し、また出生登録人口の25%ほどがメキシコ市へと移住している。人口流出の背景には、貨幣経済が浸透しているにも関わらず村には現金収入がほとんどないこと、そして都市的な生活様式への憧憬がある。都市においては、特に村出身者が日常的に集団を構成することはなく、居住地もメキシコ大都市圏に散らばっている。しかし、彼らに共通しているのは、村の聖人像への強い信仰と愛着である。

第V章では、農村在住者と農村から都市への移住者が結ぶさまざまな関係、「カルゴ」を巡る組織的・制度的関係が、詳しい事例とともに論じられている。学位請求者は、村の共同体意識に密接に関わる組織・制度として、カルゴ・システムに焦点を当てている。カルゴ・システムは16世紀に為政者スペイ

ン人によって新大陸の植民地にもたらされたものであるにもかかわらず、植民地時代の産物であるという意識はなく、所与のものであり、村への帰属を確認する重要な制度であると認識されている。

カルゴは、共同体の行政的および宗教的なさまざまな役職を、共同体の成員が無償、あるいは有償で担う義務を指す。この章では、村の宗教行事について詳細な記述を行うとともに、役職の選出過程、そして都市移住者の行事への参加状況や寄付の実態などが実例に基づいて詳しく述べられている。

多くの村人が都市部へ流出する今日にあっても、カルゴ・システムは機能不全に陥っていない。都市移住者は現金を村役場や祭礼遂行者に寄付することにより、カルゴを担い、それによって「村人」としての地位を維持する。村との紐帯を維持することなく、都市に溶け込んでいく者もある一方、都市に定住しても、聖人をまつる村の祭りに参加し、村の墓地に埋葬されることを希望するならば、このような義務を果たして「村人」としての地位を確保する必要がある。そのような都市移住民から、村に残る家族や村役場に現金が流れることで、現在のサン・マルティンは、生産性の低い農村であるにも関わらず、それなりに豊かな暮らしを享受している。

結章では、カルゴを担うことが都市移住者にとっていかなる意味を持つかが論じられる。カルゴは村での威信を得るための重要な制度であるが、村の中ばかりでなく、都市への移住者にとっても、村との関係を保ち、かつ埋葬の地を確保する、換言すれば村の成員としての地位を確保するために重要な意味を持っている。この関係を、学位請求者はブルデューの用語を借りて整理する。出稼ぎないし移住による村への現金収入を「経済資本」とし、また彼らがそれによって得る威信を「象徴資本」として説明する。そしてその転化を可能にするのが、村人及び村出身者に共有される信仰や価値、倫理などの「文化資本」である。

## 論文の評価

ラテンアメリカの農村研究における古典的な視角は、閉鎖的な農民共同体という概念であり、カルゴ・システムはその共同体を支える堅固な宗教・行政組織として捉えられてきた。しかし、都市への出稼ぎや移住が増加している今日にあって、このような共同体がいかなる変容を示しているか、また、都市を構成する農村出身者が、出身地とどのような関係を維持・形成ないし切断しているか、という問題は、当然のごとく提起される。

本論文は、長期間の数次にわたる定点観測的なフィールドワークを通じてこの問題に取り組み、農村の社会生活に関する詳細な観察から、主としてのその祭礼における都市への移住者の関わりに関する分析を行い、村落居住者と都市移住者のある種の相互依存関係を明らかにし、かつその関係の成立条件について考察している。この試みは、従来、閉鎖的な農民共同体の根幹として捉えられてきたカルゴ・システムが、都市への移住者、つまり農村という共同体から離れる人々をも含んだ形で、新たな機能を果たしていることを明らかにした点で、カルゴ・システム研究ならびにメキシコ農村研究に新たな一歩を記すものと評価される。

また、ラテンアメリカを対象とした研究では、不平等や不公正など社会的な葛藤の存在が大きく取り扱われてきたが、本論文では、そのような問題に関心が集中することによるステレオタイプ化を避け、農村の居住者とそこからの都市移住者が、過度の軋轢を生起させることなく、共同体の外延を柔軟化し

ている事例が描かれている。この点でも、メキシコ社会を新たな側面から照射した研究として、評価される。

さらに、都市部での「先住民」エスニシティの発現もまた、一般の広い関心を喚起してきたが、学位請求者はやや趣を異にする視点を導き出している。出身地に対する移住者の思い入れが、必ずしも「エスニシティ」として表面化されるとは限らない、ということである。学位請求者の調査の範囲内であるが、主たる帰属意識は「村落」に収斂し、「\_\_族」という表現をとることがない。これが、固有の言語をすでにほとんど失い、スペイン語が日常的に用いられている、という状況と大きく関わっていることは疑いを得ない。しかし、強調されねばならないのは、現代のメキシコ社会においては、しばしば強調される先鋭なエスニシティ発現よりも、学位請求者の描く農村からの移住者の意識のあり方の方がむしろ一般的であり、より大きな現実を反映しているのではないかと考えられることである。

### 口頭試験の概要

学位請求者と論文審査委員の間の質疑応答の概略は以下の通りである。

まず評価すべき点として、「閉鎖的な農民共同体」と結びつけて議論されてきたカルゴ・システムを、村落空間に限定されない、開かれたものとして議論したこと、葛藤の例ばかりでなく、むしろ、問題点もなくうまく機能している例を提示し得たこと、非常に詳細な記述を可能にしたフィールドワークの努力などが委員から挙げられた。

調査地選定の必然性に関する質問に対しては、メキシコ市へ8時間程度の距離であること、また、一般に先住民運動や葛藤を前面に押し出した研究が多い中、比較的システムとしてうまく作動している例を示したかった、という答えが示された。修士論文の準備段階から発してほぼ十年にわたる研究であるが、記述における民族誌的現在をどのように考えるか、という質問に対しては、調査開始時から今日まで、基本的には移住者が増加している、という傾向をも含め、大きな変化はないという答えが示された。しかし、論文で扱うには至らなかったが、ごく最近の傾向として、アメリカ合衆国への出稼ぎ、移住が始まっていることが付け加えられた。

村落での調査と比較し、都市移住民に関しては社会関係の細部にまで調査が及んでいない、という指摘に対しては、現実に都市での出身者のネットワークが強力に作用していないこと、そして巨大都市においては農村での人類学的な調査方法をそのまま適応できなかったことが説明された。これは人類学に共通する問題点であるともいえよう。

また、プロテスタントへの改宗者が存在することをどう捉えるのかという質問に対し、プロテスタントにはおおむね宗教的な色彩の濃いカルゴでなく、行政的なカルゴを割り当てており、基本的にはカルゴ・システムの体制下にある、という見方が示された。カルゴが形を変えつつも依然として機能しているのは、諸条件の微妙なバランスの結果ではないかという質問に対しては、学位請求者は、カルゴ・システムは非常に強固なものであり、米国が移住先になっても、基本的な図式は変化しないであろう、という見方を示した。同時に、土地の共有という現状が変化すれば、当然ながら現在の拡大された共同体やそれを支えるカルゴは根本的な変化を被るであろうが、少なくとも現時点においては、土地の収奪、私有化などは始まる兆しが無い、という答えも示された。しかし、現状が流出者と居住者の微妙なバラ

ンスの上に立っていることは確かであり、そのバランスがどのような変化によって崩れるのか、今後の課題として追求される必要があろう。

ブルデューの概念の使用がやや唐突な印象を与えること、単なる威信経済とどう違うのか、という疑義に対しては、ブルデューの概念が調査結果を整理するのに好適であったこと、威信が威信として受容されるためには、身体・思考に埋め込まれた文化資本を概念として立てる必要があること、が説明された。たしかに、説明のための概念としては有用であるが、概念の使用がそのレベルに留まっている点は否めない。ただ、その概念群をさらに発展ないし修正することは、特にこの論文の主眼ではない。

一農村とメキシコ市の調査のみでは、結論が一般化しえない、というコメントに対して、学位請求者は、いくつかの農村を観察はしたが、データとして収録するには至っていないこと、今後の課題として、より多くの事例を集めたい、という意味を表明した。また、将来の課題として、都市と農村の関係のあり方を探るために、メキシコ市内に編入された農村の調査を行いたい、という希望が表明された。

また、本論文の事例のような象徴資本と経済資本の交換関係は、都市－農村間のみならず、大きな視点で捉えれば、政府による「伝統文化」の「保護政策」や先進国 NGO などの援助に関しても同様な構図が描けるのではないかと、という指摘に対しては、現在までのところ、扱った事例に関しては、そのようなことは現実には生じていない、という説明であった。しかし、より大きな視点に立って、入れ子構造のような構図を見いだす試みは、今後に残された課題であるといえよう。

委員からはさらに、日本における宮座や宮田のような制度、祇園祭りにおける共同体などとの比較についての示唆も成された。

委員の質疑に対する応答は、おおむね的確かつ熱意にあふれるものであり、研究課題に熱心に取り組む姿勢と、今後の研究意欲を十分に示すものであった。

#### 論文審査及び最終試験判定

学位請求者の提出した論文は、長期間のフィールドワークによる詳細な観察に基づき、これまで「閉鎖的農民共同体」との関連でのみ捉えられてきた祭礼に関わる社会慣行が、村落世界の開放性が高まる中、その基本的骨格を保ちながら、新たな展開を示し、村落居住者と都市移住者の相互依存関係を支えていることを明らかにした。このことにより、従来の都市研究と農村研究を繋ぐ新たな可能性を示したものと評価される。また、ラテンアメリカにおける「共同体」の柔軟な変容の例を提示することにより、メキシコ社会を新たな側面から照射した研究として評価される。学位請求者の研究は理論に走ることのない地味な性格のものではあるが、フィールドワーカーとして好個の調査地を見いだす嗅覚を感じさせる。ラテンアメリカ全域にわたる広い見識を有する木村秀雄教授と都市人類学の泰斗である日野俊也教授の外部委員に加え、同じく都市人類学の新たな地平を開拓した小川了教授、フィールドワーク及び人類学全般にわたって優れた見識を有する石井溥教授、そして移住、出稼ぎを近年の研究テーマとする宮崎からなる学位審査委員会は、論文及び口頭試問の内容を審議した結果、全員一致で、博士（文化人類学）を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。